

【翻 訳】

ヨーゼフ・ロート 『聖なる酔っぱらいの伝説』 (1939年)

山 中 博 心

1

1934年の春のとある夕べ、落ち着いた年格好のひとりの紳士がセーヌ川に架かる橋の一つから岸辺へと延びる石造りの階段を上って来た。そこはほとんど世界中の誰もが知っているが、この機会にもう一度記憶に呼び起こしておくだけのことはあるが、パリの宿無したちがそこを根城にしている、もっとうまく言えば、占領しているのである。

そんな宿無しのひとりが落ち着きのある年配の紳士の方に偶然歩いて来た。ついでながら言うておけば、この紳士は身なりは良く、旅人のような印象を与え、見知らぬ町々の名所旧跡を訪ね歩いているように見える。宿無しは確かに同じような生活をしている他の宿無しのように荒んでいて、哀れむべき者のように思われた。しかし彼がその紳士には特に注目に値する者のように思えた。何故だかは分からないが。

今言ったように既に夕暮れであり、川岸の橋の下は上の埠頭や橋上よりも暗さを増していた。見るからに見穿らしい宿無しは少しばかり足取りが覚束なく、身なりの良い中年の紳士には宿無し男のことが気付いていないようであった。しかしよろけることもなく、しっかりした足取りの紳士は明らかに遠くから既に、足取りの覚束ない男に気づいていたのである。年配の紳士は丁度うらぶれた男の行く手を遮る格好になり、互いに向かい合って立つこととなった。

身なりの良い年配の紳士は言った。「どちらに行かれるのですかご同輩。」宿無しは一瞬紳士に目をやってから答えた。「私に仲間がいるとは知りませんでした。この道を行けばどこに行くのかも知りません。」「あなたに道を教えてあげようと思っています。変な申し出をしても悪く思わないで下さい」、と紳士は言った。「どんな援助でも受けるつもりです」、とうらぶれた男は言った。

「あなたがいろいろと間違いを犯しておられることは分かります。しかし神様が私を御使わしになったのです。きっとお金がおいりようでしょう。こんな言い草を悪く思わないで下さい！ 私はお金を沢山持っています。いくら必要か正直に言って下さい。少なくとも当座は。」

宿無しは少し考えてから言った。「20フラン。」「それは少な過ぎる、きっと。200フランは必要でしょう」、と

紳士は答えた。うらぶれた男は一步退いた。今にも倒れんばかりであった。よろめきながらではあったが、ちゃんと立ったまま言った。「20フランよりは200フランの方が都合がいいですが。しかし私にも自尊心があります。あなたは私のことを見誤っておられます。あなたが申し出てくださるお金を頂くわけにはいきません。理由は三つあります。一つはあなたと知り合ったことをうれしく思っていない。二つにはどのように何時お返ししていいか分かりませんから。三つには私に催促される可能性はありません。というのも宿無しで毎日橋の下を転々としています。先ほど強調しておきましたように、自尊心のある人間です、例え家はなくとも。」

「私にも住むところはありません。毎日橋の下を転々としています。お願いですから200フランを快く受け取って下さい、あなたのような人には端金でしょうが。返済についてですが、何故あなたに返済していただく銀行をお教えできないかを説明するには話がずっと遡ります。つまり私はクリスチャンになったのです。というのも幼き聖テレゼの話を読んだからです。それに私は特に小さき聖像を崇拝しています。それはパティニョルの聖マリア教会にあり、あなたも簡単に見られるでしょう。つまりあなたが200フランに対して良心の呵責をお感じになったら、僅かな額の借金を抱えたくなければどうぞそのパティニョルの聖マリア教会に行ってください。丁度ミサの最中の司祭にそのお金を渡して下さい。そもそもあなたが誰かに借りがあるとすれば、それは幼き聖テレゼにです。しかしお忘れなく、パティニョルの聖マリア教会ですよ。」

「分かりました、あなたが私のことを、そして私の自尊心のことも理解しておいでだということを。約束は守るとあなたに誓います。でも日曜日にしかミサには行けません。」

「どうぞ日曜日に」、と紳士は札入れから200フランを取り出し、よろめき加減の男に手渡して言った。「有り難う。」

「私は満足です」、と、そそくさと深い闇の中へ消えて行った。

というのもその間に橋の下は暗くなってしまうていた。しかし橋の上や埠頭には銀色のランプが灯されていた、楽しいパリの夜を告げるかのように。

2

身なりの良い紳士も闇の中に消えて行く。実際彼には改宗の奇跡が訪れた。そして極めて貧しい人々を導こうと決心したのである。そのために橋の下に住んでいたのである。

しかし宿なし男に関しては呑み助、呑んでくれであって、名前はアンドレアス、多くの呑み助がそうであるように偶然に身をまかせて生きていた。200フランを手に入れてから時間が経っていた。ひよとしたらそれから時間が経っていて、橋の下には珍しいランプの乏しい明かりの下で紙切れと短くなった鉛筆を取り出し、幼き聖テレゼの住所を書き留めた。この時から彼女への借金となった200フラン全額を取り出した。彼はセーヌ川の岸から埠頭へとつながる階段を上って行った。そこにレストランがあることを彼は分かっていたのである。中に入ってたつぷりと飲み食いをした。多額の支払を済ませて一ビン持ち帰った。いつものように橋の下で過ごす夜のために。然り、肩籠から新聞紙を取り出した。しかし読むためではなく体に掛けるためである。新聞を被ると暖かい、このことを宿無したちは皆よく知っていた。

3

次の朝はいつもより早く起きた。いつになくぐっすり眠ったからである。しばらく考えたあと、昨日自分に起こった奇跡を思い出していた。新聞を被って寝た暖かい昨夜は特によく眠れたと思い、長らく洗っていなかった体を洗うと思った。何ヶ月か前から、つまり比較的寒い季節にはやらなかったことである。しかし服を脱ぐ前にもう一度左のポケットに手を突っ込んでみた。思い起こせばそこに奇跡の名残が形として残っているはずであった。今彼は少なくとも顔と手を洗うためセーヌ川の土手の人目につかない場所を探した。至る所に彼と同じような貧しい人がいて、(そういう人たちのことを嘗ては落ちぶれた人と呼んでいた) 体を洗うところを見られているように思えたので敢えてやらず、手を水に浸けるだけで満足した。そのあとズボンを履いてもう一度手を左のポケットに突っ込んだ。完全に体の汚れが取れ、人が変わったような気分であった。

それから明るい日の中へ出て行った。思いだせないくらい前から無駄にしがちだった昼日中に出て行った。心を決めて、今日もまたいつものロシア・アルメニアのレストラン『タリバリ』がある80番街へ行った。日々の偶然が与えてくれた僅かな金を安物の酒につぎ込むために。

途中通りかかった最初の新聞売り場に立ち寄った。幾つかの週刊誌に惹き付けられたためである。突然、今日が何曜日か、何日か、なんの日かが知りたいという欲求

にかられた。つまり彼は新聞を一部買って何曜日かを知って、自分が木曜日に生まれたのだということを思い出した。何日かは確かめずこの木曜日こそ自分の誕生日にしようとして心に決めた。既に子どものように歓喜に捉えられ、一瞬の良き高貴な決断に身をまかせることに迷うことなく、『タリバリ』には入らず、もっと高級なイタリア酒場のほうに躊躇うことなく入った。そしてコーヒーにはラム酒を垂らしてもらい、バターパンを食べた。

つまり襤褸を身にまとっているにも拘らず、知った上で金持ちが入りそうなビストロに入り、テーブルに腰掛けた。長い間テーブルに凭れ掛って飲むのに慣れていた彼が。坐ったところの向い側に鏡が掛かっていて、自分の顔を観察せざるを得なかった。まるで今改めて自分を知ったかのようにである。勿論彼はギョッとした。同時に自分が何故この何年間か鏡を見るにを畏れていたかを知るところとなった。自分がこんなに落ちぶれているのを我が目で見るのは気分の良いものではない。じっと見つめる必要がない限り、ほとんど顔を持たないかそれとも昔の落ちぶれる前の生まれつきの顔であるかのように思うことにしていた。

すでに述べたように彼がギョッとしたのは特に自分の人相を廻りにいる礼儀正しい男たちと見比べた時である。1週間前に彼はヒゲを剃ってもらった。出来上がりはまずまずである。僅かな代金で剃ってやろうと言ってくれる運命を共にする仲間から。しかし今新しい人生を始めると決心したのだから、本当にちゃんと剃ってもらうに値する。何かを注文する前に本職の床屋に行こうと決めた。

善は急げ —— 彼は床屋に赴いた。イタリア酒場に戻って来たとき、さっきまで彼が座っていた席は空いてなく、今度は遠くからしか鏡を覗き込めなかった。しかし自分の姿が変わったこと、若返ったこと、男前になったことは十分分かった。その通りである。まるで彼の顔から輝きが出、それが衣服のボロを帳消しにしてくれていた。見るからに擦り切れたシャツの胸、それに赤と白の縞のネクタイが襟の裂けた縁に巻き付けられていた。我らがアンドレアスは腰を降ろした。自分は変わったのだということを意識して、自信のある声で注文した。まるで昔のガールフレンドが戻ってきたように、彼が嘗て持っていた昔の声が返って来た。「ラム酒入りコーヒー」と。ボーイは鄭重に彼の注文を受けた。それは敬意を表す客人にボーイが示すような鄭重さであった。この態度がことに我らがアンドレアスの心をくすぐり彼の気分を高め、まさに今日が自分の誕生日だという思いを強くした。

宿無しの近くに坐っていたひとりの紳士が、しばらく彼をじっと見つめてから向きを変えて言った。「お金が欲しくないですか。私のところで働けますが。つまり私は明日引越しをするので、妻と荷造り屋を手伝ってほ

しいのですが。あなたは力がおありのようだが。出来ますか、やる気をおありですか。」「やる気があるのは確かです」、とアンドレアスは答えた。「2日間の仕事の見返りに何がほしですか。明日と土曜日？ というのは我が家はかなり大きく、そのことを知っておいていただきたい。そしてもっと大きなところに引っ越すのです。家具も多いです。私自身自分の仕事がいっぱいあります。」「お願いします、手伝います」、と宿無しは言った。

「飲みますか」、と紳士は尋ねた。そして彼はベルノーを2杯注文して、二人は乾杯し、報酬の件を話し合った。200フランということで折り合った。「もう一杯飲みますか」、と最初の2杯を飲んでから紳士は尋ねた。「しかしお金を返しに行かなければなりません」、と宿無しは言って、「あなたは私のことをご存知じゃない。僕には自尊心があります。真面目な仕事人です。僕の手を見て下さい。」そう言って手を差し出した。「汚れてタコができています手です、真面目な仕事人の手です。」「そういう手が好きです」、と紳士は言う。目を輝かし、子どものように頬を赤らめて、顔の真ん中には黒くて小さい口髭があった。全体的には可成り友好的な感じがした。彼のことをアンドレアスはとても気に入った。

こうして二人は一緒に酒を飲み、2杯目はアンドレアスが払った。子どものような顔をした紳士が立ち上がったとき、とても太っていることが分かった。紳士は名刺を札入れから取り出し、そこに住所を書いた。そのあと同じ札入れから100フラン紙幣を取り出し、名刺と一緒にアンドレアスに渡した。

「きっと来て下さい、早朝8時です、忘れないで下さい。残りはその時にお渡しします。そして仕事が終わったらまた二人で食前酒を飲みましょう。ではまた、友よ!」、と言って太った童顔の紳士は立ち去った。アンドレアスが不思議に思ったことはこの紳士が同じ札入れから名刺とお金を取り出したことである。

さてお金を手にして、もうこれ以上手に入る見込みがなくなると、紳士と同じような札入れを手に入れようと心に決めた。そのために革製品の店を探しに出かけた。道の途中にある最初の店に若い売り子さんがいた。彼にはとてもかわいく思えた。商品ケースの後ろに立つ彼女の姿の美しさ、体にピッタリした黒い衣装に身を包んで、胸には白い胸当てをつけ、髪の毛は巻き毛、右の手首には重たそうなブレスレットをつけている。彼女の前で彼は帽子を取り、陽気に言った。「札入れを探しているのですが。」若い娘は彼の粗末な服をちらっと見た。しかしその視線には嫌みなものはなかった。ただ客を値踏みしたかっただけである。というのもその店には高価なもの、そこそこのもの、まったく安価な札入れが置いてあったからである。余分な質問を省くためにすぐに彼女は梯子に上り、一番上の棚から箱の一つ持って来た。その中には所謂客が返品した札入れが入っていた。他の

札入れと交換するためであった。その折娘の脚はとても美しく、ほっそりとしたハーフブーツを履いているのが分かった。彼は半ば忘れかけていた昔のことを思い出した。彼はそのようなふくらはぎを撫で、そのような足に口づけした昔のことを思い出していた。しかしそうした女性たちの顔を最早思い出することはできない。しかし一つだけ例外があった。その顔が元で彼は獄に繋がれることになったのである。

その間に娘は梯子を降りて来て、箱を開け一番上にあった札入れから一つ選んだ。彼はじっくりそれを眺めることもなく支払を済ませ、帽子を被って娘に微笑みかけた。娘も微笑んだ。上の空でその新しい札入れをポケットに入れた。しかしお金はその横に置いたままであった。突然その札入れが無意味なように彼には思えた。それに比べて彼の視線が向けられたのは娘の脚と梯子であった。そのため彼の足が向いた方角はモンマルトルであった。嘗て彼が享楽に耽ったあの場所を探すため。勾配のある狭い小径に若い娘たちのいるイタリア酒場があった。彼は何人かと一緒にテーブルに着き、皆の分を支払い、ひとりの娘を選んだ。彼の一番近くに坐っていた女の子であった。すぐに彼女のところに歩み寄る。やっとお昼を過ぎたところだというのに彼は夜が白み出す頃まで眠った。好意的な女将たちが彼を眠らせておいてくれたのである。

次の朝、つまり金曜日に仕事に出かけた。あの太った紳士のところへ。その家の奥さんの荷造りを手伝うのが彼の仕事であり、家具を梱包する人たちはすでに仕事を片付けており、アンドレアスには重たいがそれほどきつくない補助的な仕事が残されていた。しかし時間が経つうちに筋肉の力が戻ってくるのが感じられ仕事が楽になった。というのも彼が仕事をして成長して来たのは炭坑の仕事であり、父親も炭坑労働者であり、百姓であった祖父と同じように少しばかり百姓経験もあった。もしその家の奥さんが彼の気分を高ぶらせるような無意味な指図をしたり、一度にあっちだこっちだと呼びつけなければ、何が何だか分からなくなはならなかっただろう。しかし彼女自身が興奮していたことを彼は知っていた。いきなり引っ越しすることは彼女には容易いことではなかった。ひょっとしたら彼女は新しい家に不安を感じているのかもしれない。彼女は服を着て立っている。コートを纏い、手袋をはめ、小さなバッグと雨傘を手を持って。まだ一昼夜そして明日もまだこの家にいなければならぬことを知っているのに。時折口紅を付けなければならぬ。アンドレアスはこのことを良く理解した。彼女は女性だもの。

アンドレアスは一日中仕事をした。彼の仕事が終わったとき奥さんは言った。「明日の朝、7時きっかりに来て。」小バッグから財布を取り出した。その中には小銭が入っていた。彼女は暫く手探りしてから10フラン硬貨

をつかんだが、また手を離れた。そのあときっぱりと5フランを取り出し、「チップよ、しかしすべてを酒代にしては駄目よ。明日は時間通りに来てよ」と言い添えた。

アンドレアスは礼を言って出て行った。チップ分は酒代にした。しかしそれ以上のことはなかった。とあるホテルでの一夜は寝過ごすこととなった。

朝7時に起こされて、元気よく仕事に向かった。

4

そして次の朝、彼は家具梱包人よりも早くやって来た。前日同様家の奥さんは既に身繕いをして帽子を被り、手袋をはめて立っていた。まるで眠らなかったかのように。そして親しげに彼に言った。「あなたが昨日私の言いつけに従って全額をお酒につき込まなかったことは分かるわ。」

さてアンドレアスは仕事に取りかかった。彼女が引越しをする新しい家までお供をした。そして待っているとあの太った主人がやって来て、アンドレアスに約束のお金を渡した。「今からお酒にお誘いますが、一緒に行きましょう」と太った男は言った。

しかし妻はそうさせなかった。二人の間に割って入り夫の行く手を遮って言った。「すぐに食事をなさらなければ。」しかしてアンドレアスだけが急いでひとりで家を後にし、その夜はひとりで飲んで食べた。さらに2軒のイタリア酒場に入り、カウンターで飲んだ。沢山飲んだが酔っぱらうことはなく、お金を使い過ぎないように注意していた。約束を覚えていて明日はバティニョルの聖マリア教会に行って、少なくとも借金の一部を幼き聖テレゼに返そうと思った。勿論、結構飲んでいたため、貧しさだけが貸し与えてくれる本能や確かな目でもってしても、あの界隈の最も安いホテルを見つけられるような状態ではなかった。

それ故、幾分高めのホテルにしてしまった。ここでも前払いであった。というのも擦り切れた服で、旅行鞆も持っていなかったからである。しかし彼にとっては大したことではなかった。そう、何もなく次の朝までぐっすり眠ることができた。近くの教会の鐘で目を覚ました彼はすぐに今日の大事なことが何かを知った。日曜日である。借金を返済するために幼き聖テレゼのところに行かなくては。さっと服を着て急ぎ足で教会のある広場に向かった。しかし10時のミサには間に合わなかった。人々が彼の方にぞろぞろと出て来た。彼は尋ねた。次のミサは何時ですかと。12時です、と言われて少しばかり途方に暮れて教会の入り口のところに立っていた。まだ1時間ある、この時間を路上で待ちたくなかった。どこで待てば一番いいか、と周りを見回すと教会の丁度斜め向かいにあるビストロが目にとまった。彼はそちらに足を向け、残りの1時間をそこで待つことにした。

財布の中にお金が入っていることを知っているという自信をもってペルノーを注文し、これまでの人生でたらふく飲んで来た者の自信を持って飲んだ。さらに2杯、3杯と飲み、グラスに注ぐ水もだんだんと少なくなってきた。4杯目が出されたときには、自分が2杯飲んだのか、5杯なのか、6杯なのか分からなかった。またこの店に何故入ったのかも忘れていた。覚えていたのはある義務、名誉ある義務を果たすということであった。支払を済ませ、立ち上がり兎も角もしっかりした足取りでドアから出て行き、左斜め前の教会に目をやった。即座にここが何処で、何故、何のためにここにいるのかを思い出した。誰かが自分の名前を呼ぶ声を耳にしたのは、丁度教会の方に一歩踏みだそうとした時であった。「アンドレアス」という声は女性の声で、記憶の底に埋もれてしまっていた声であった。彼は立ち止まってその声のする方に頭を向けた。すぐにその顔が誰だか分かった。その顔の持ち主のことで彼は獄に繋がれることになったのである。それはカロリーネ、カロリーネ！ 彼が知らないような帽子や服を着ていたが、その顔は間違いなく彼女であった。それで彼女がさっと広げた腕の中に躊躇することなく飛び込んだ。「何という出会い」、と彼女は言った。それは本当に彼女の声、カロリーネの声であった。

「ひとり？」と彼女が言う。「そう、ひとりだよ」と彼が答える。

「行きましょう。つる話もしたいし」、という彼女。

「しかし、しかし、約束があるんだ」、という彼。

「女の？」、と彼女は尋ねる。「そうだけど」、と落ちぶれた男は答える。

「誰？」、という彼女の問いに、「幼き聖テレゼ」、と彼は答える。

「彼女なんて何てことないわ」、カトリネが答える。丁度そのとき一台のタクシーが通り過ぎようとした。カロリーネは持っていた傘で車を止めた。すぐに行き先を運転手に告げていた。あっという間にアンドレアスは車の中の彼女の隣に坐っていた。既に車はゆっくりと走り出していた、アンドレアスにはそう思えた。見覚えのある通り、見知らぬ通りを通過して、何処だか分からない辺りを走っていた。

今二人は郊外のとある界隈に来ていた。車が停まったところの風景は明るい緑、早春の緑、つまり園庭があり疎らな木々の後ろにひっそりとしたレストランが身を響めていた。

カロリーネが最初に車から降りた。彼には見慣れていたが、はしたなく彼の膝をまたいで彼女は降りた。代金は彼女が払い、彼は付いて行った。そして二人はレストランに入り、犯罪を犯す前の若い時と同じように緑のブラッシュ地のシートの上に腰掛けた。いつものように彼女は注文をして、彼をまじまじと見つめた。彼は敢えて

彼女の顔を見なかった。

「この間何処にいたの？」と彼女は尋ねた。「至る所、何処でもないところ」、と彼は答える。「2日前に仕事を再開したのさ。君と会わなくなっただけで飲んだくれていたよ。我が同胞たちと同じように、橋の下で寝ていたさ。多分君はもっと良い人生を送っていただろう—— 殿方と一緒に」、と少し間を置いて付け加えた。

「あなたのほうは？」と彼女が尋ねる。「飲んだくれて、仕事もせずに橋の下で寝ていて、テレゼなんて言う女性と知り合いになる機会があったの？ たまたま私と出会わなかったら彼女のところに行っていたんでしょ。」

彼は答えず、黙っていた。やがて二人は肉を平らげ、次にチーズ、そして果物が出てきた。彼がグラスからワインの最後の一口を飲み干したとき、あの突然の恐怖が新たに彼を襲った。カロリーネと一緒に暮らしていた時、何年も前にしばしば感じた恐怖である。またしても彼は彼女から逃げたくなくて、大きな声で「ボーイさん、勘定」、と言った。そのとき彼女が遮った。「支払は私よ。ボーイさん。」見る目のある経験豊かなボーイは言った。「先に私をお呼びになったのは旦那様の方です。」つまりアンドレアスということで、彼が支払をした。その時有り金を全部左のポケットから取り出した。お金を数えた後、テレゼに借りている額には足りないことが分かり、怖くなった。勿論ワインのお陰で少し気持ちは和らげられてはいたが。しかし彼は心の中で呟いた。近頃自分には不思議なことが次から次に起こる。きっと来週には借りているお金の工面も出来るだろう。通りに出てからカロリーネが言った、「あなたお金持ちね、テレゼに囲われているの。」

彼は答えなかった。自分が正しいとカロリーネは確信していた。彼女は映画に連れてってとせがんだ。それで彼は彼女と映画館に行くことになった。映画は久しぶりであった。映画を見るのも久しぶりであったが、映画の中身もほとんど理解できず、カロリーネの方に凭れ掛かって寝入ってしまった。その後二人でアコーディオンが演奏されているダンスホールに行った。最後に踊ってから時が経ちすぎていて、カロリーネと踊ろうとしたがともに踊れなかった。別の男が彼からカロリーネを取ってしまった。彼女は相変わらず快活で魅力的であった。

彼はひとりでテーブルに腰掛け、またしてもペルノーを飲んだ。それは昔と変わらなかった。カロリーネは他の男と踊り、彼はひとりでテーブルに坐って飲んでいった。その後突然、彼は力づくで他の男から彼女を引き離してきて、彼女に言った。「家に帰ろう。」彼女の襟首をつかんで、彼女を離すまいとした。勘定を済ませて、彼女と一緒に家に帰った。彼女の住まいは近くにあった。すべては彼が犯罪を犯す前と同じであった。

5

朝とても早く目を覚ました。カロリーネはまだ眠っていた。開けた窓の向こうでは鳥が一羽一羽さえずっている。暫く目をつむって横になっていた。ものの3分もなかったが、この3分間にあれこれと考えてみた。この1週間ほど奇妙なことが起こったことは暫くなかったように思えた。突然、顔の向きを変えて右側にいるカロリーネを見た。昨日彼女に出会った時には気付かなかったことに今気が付いた。彼女は年老いて、青白く、贅肉もついで、苦しそうな息づかいで年を重ねた女の眠りであった。自分自身の上を過ぎ去って行った年月の移ろいを切に感じた。自分も変わったのだと思った。カロリーネを起こさず、すぐに起きようと、偶然、というよりは運命的に立ち去ろうと心に決めた。昨日の彼女との出会いがそうであったように。こっそりと服を着て、新たなる一日へ向けて立ち去った。彼の馴染みの日々の中へ。

つまり、本来は彼の普通ではない日々の中へなのだが。というのも暫く前に手に入れたかそれとも見つけた最初のお金を入れてあった左の胸ポケットに手を入れたとき、50フラン紙幣と僅かなコインしか残っていないことに気付いたからである。ずっと以前からお金の意味を知らず、お金の意味にも決して注意を払うこともなかった。彼は今、ギョツとした。いつもお金があると思っていた男が財布にほとんどお金がないのに気付いて、狼狽したときに似ている。突然彼には、朝の灰色で人気のない小径の真ん中で、何ヶ月も文無しであった自分が突然貧乏になったように思われた。何故なら彼はこの何日か持っていた多くの紙幣が財布の中になくことに気づいたからである。また次のようにも思った。文無しであったのはずっとずっと以前のことであり、元来自分に保証された生活水準を支えてくれるはずの額を、有頂天になって軽率にもカロリーネのために出費してしまったのだと。

彼はカロリーネに腹を立てている。これまで一度もお金を大切にしたことのない彼が突然、お金の価値に目覚めたのである。突如として彼に分かったのである。50フラン紙幣を持つことは、それぐらいの価値のある男には滑稽な額であるが、そもそも自分に人間としての価値があるのかをはっきりさせるためには、ペルノーのグラスを傾けながらじっくり考えてみる自分が自分には不可欠であると。

さて彼は近くにある飲み屋の中から自分に一番気に入っているように思えた一軒を探した。中に入って、腰を降ろし、ペルノーを一杯注文して、それを飲みながら、もともと自分が滞在許可証を持たずにパリで生活していることを思い出した。彼は自分の旅券を確かめてみた。そこに彼が見たものは、自分がもともと退去処分を受けていることである。何故なら、最初炭坑労働者として

フランスに来たのであり、ポーランドのシュレジアのオルシヨビッツ出身であったからである。

6

その後、半分破れた旅券を自分の前のテーブルの上にひろげて、何年も前に新聞でフランス政府が炭坑労働者を募っていることを知った時のことを思い出していた。

彼は生涯遠くの国に憧れていた。そしてケベックの炭坑で働いていて、同国人のシェビエツ夫妻のところに寝泊まりしていた。彼はその奥さんが好きで、あるとき夫が妻を殴り殺そうとしたのでアンドレアスは夫を殴ってしまったのである。それから2年、彼は獄中であった。

その奥さんこそまさにカロリーネであった。

既に無効になってしまった旅券を眺めながら、アンドレアスはこうしたことをすべて思いだしていた。その後もう一杯ベルノーを注文した。彼は自分が不幸だと思った。

やっとのことで腰を上げることができたとき、確かにある種空腹であったが、しかしその空腹は酔っぱらい特有の空腹であった。いわばそれは（摂取するというよりも）特殊な欲求であって、まさにほんの暫く続くだけですぐに治まる代物である。それを感じた者がその時に快と思えることを想像すれば治まるものである。自分の姓がなんであるかを彼は長いこと忘れていた。しかし今無効になった旅券を見て、カルタク、アンドレアス・カルタクであることを思い出した。ここ何年来久しぶりに自分を再発見したような気分であった。

いずれにしても、この前のように、太って口ひげを生やした子ども顔の男をこのカフェに送り込み、新たにお金を稼がせてくれない運命に対していかほどか恨みたい気持ちであった。何故なら一度ならずも二度、三度と奇跡が起こった者にとっては他のどんなものにもしっくりとこないのである。そうだ！ 人間の本性は偶然通りかかった運命が約束してくれたように思えることが、絶えず全てが与えられないと機嫌を悪くする程度のものである。人間とはそんな者だ。—— 我々がアンドレアスからそれ以外のものを期待しようというのか。結局その日の残りはあちこちのイタリア酒場で時間をつぶした。自分の身に起こった奇跡の時は終わった、とすでに彼は満足していた。いまや昔のような時代が再び始まったのである。呑み助がいつも心づもりしているように、徐々に没落していくことに覚悟を決め、—— 分別のある人間はそんなことを決して経験することはないが—— アンドレアスは再びセーヌ川の岸辺の橋の下へ赴いた。

彼はそこで眠った。昼間半分、夜半分、1年前からの習わしで、あっちこっちで運命を共にする者から酒ビンを借り受けながら —— 木曜日から金曜日の朝まで。かくしてその夜、彼は夢を見た。幼きテレーゼがブロン

ドの髪の毛の少女の姿で現れ、彼に言った。「何故この前の日曜日私のところへ来られなかったの。」幼き聖女の姿は何年も前に彼が自分自身の娘をイメージしたのとそっくりであった。彼に娘などいない！ 夢の中で彼は幼きテレーゼに言った。「なんて言う口の聞き方をするんだ。私はお前の父親だということを忘れたのか。」幼き娘は答えた。「許してお父さん。お願いだから、明後日の日曜日バティニョルの聖マリア教会の私のところへ来て。」

彼がこの夢を見た夜からというもの、彼は気分も新たに起き上がり、まだ奇跡が彼の身に起こっていた1週間前と同じように、まるでその夢が本当の奇跡であると思える程であった。

もう一度セーヌ川で体を洗いたかった。しかしそのために上着を脱ぐ前に、左の胸ポケットに手を入れた。ひょっとしたら自分が知らないお金が入っているかもしれないという漠然とした期待をいだいて。彼は左の内ポケットに手を入れた。彼の手にはまったく紙幣は触れなかった。しかし確かに彼が2、3日前に買ったあの皮の札入れに手が触れた。その札入れを取り出した。まったく安物で、既に使い古され交換されたもので、予想されたように裂き皮で出来ていた。牛革。彼はこれをじっくりと眺めていた。何故ならこれを何時、何処で買ったのかが思い出せないからである。どうしてこんなものが自分のところにあるのか、と自問した。ついにそれを開けてみて分かったのだが、札入れには二つの仕切りがあった。興味津々中を覗いてみたら、その仕切りの一つに紙幣が入っていた。それを取り出したら、1000フラン紙幣であった。

その後1000フラン紙幣をズボンのポケットに突っ込みセーヌ川の岸辺に足を向けた。あわれな同胞のことなど気にかけず、嬉々として顔だけではなく首筋まで洗った。上着を着てそこから人中へ出て行った。タバコを買うためタバコ屋に入ることから一日が始まった。

確かにタバコを買うのに十分なお金を持ってはいたが、彼が不思議にも札入れの中に見つけた1000フラン紙幣を何処で換金していいのかわからなかった。既に人生経験を積んでいたのだから分かるのだが、世間の目から見れば、つまり節度ある人から見れば、その着ているものと1000フラン紙幣の間に甚だしい不釣り合いを感じるであろう。ともかくも勇気を出して、新たな奇跡によってそんな気分になり、紙幣を出そうと決心した。勿論、賢明さは完全に失っていなかったで、タバコ屋のレジの男に言ってみた。「すみませんが、1000フランでお釣がないのでしたら、小銭を出しますが。出来たら1000フランで支払いたいのですが。」

アンドレアスの驚いたことに、タバコ屋の主人は言った。「とんでもありません。私には1000フラン紙幣が必要なのです。好都合です。」店主は1000フラン紙幣でお

釣をくれた。その後アンドレアスは暫くカウンターに立ったまま、運命に対して些か感謝して白ワインを3杯飲んだ。

7

そんな風にカウンターに立ちながら、店主の幅広い肩越しに掛かっている額縁に入った肖像が目に入った。この肖像は彼の昔の同級生のオルショビッツを思いださせた。そこで店主に尋ねた。「これは誰ですか。私の知っている人だと思うのですが。」それを受けて店主もカウンターにいたお客もわっと笑い出した。そして口々に「何だって、こいつ彼のことを知らないって！」それというのもその人物は偉大なサッカー選手、シュレジア出身のカンヤクであり普通の人なら誰でも知っている人物であった。

だが、セーヌの橋の下に住む呑んでくれにどうして知り得るのか、例えば我らがアンドレアスが？ 特に今しがた1000フラン紙幣でお釣をもらった手前、恥ずかしくなって次のように言った。「当然、彼のことは知っているよ。それどころか私の友人です。でもこの肖像は出来が悪いよ。」それ以上質問されないようにそそくさと勘定を済ませて店を後にした。

さて彼は空腹を感じていた。次の酒場を探し、食べて、赤ワインを一杯飲み、チーズの後コーヒーを飲んで、その日の午後は映画館で時間を潰すことにした。どの映画館かは決めていなかった。彼の方に歩いてくる裕福そうな男たちがひとりひとりそうであるように、その時自分が沢山お金を持っていることを意識して、大通りの方に歩いて行った。オペラ座とカピシーヌ通りの間で気に入るような映画を探し、最後に一本の映画を見つけた。映画を予告する看板にはひとりの男が描かれており、明らかに遠くへ冒険に出て死のうと思っている男であった。看板に描かれているように男は非情にも照りつける砂漠の中を足を引きずりながら歩いていた。アンドレアスはその映画館に入った。太陽に焼かれる砂漠の中に行く男の映画を見た。映画の主人公に同情し、アンドレアスは既に男に対して親近感を持ち始めていた。その時突然、映画は思いがけずハッピーな展開となり、砂漠の中の男は通りがかりのキャラバン隊に助けられ、ヨーロッパ文明の懐に戻ることができた。その後はアンドレアスは映画の主人公への共感を失い、今にも立ち上がろうとした時にスクリーン上にあの同級生の写真が映し出された。それはほんの少し前に彼がカウンターに立ってイタリア酒場の店主の肩越しに見たものであった。偉大なサッカー選手カンヤク、20年前に同じ机に一緒に坐っていたことを思いだし、決心した。明日にでもすぐにあの昔の同級生がパリにいるかどうか問い合わせようと。

というのも我らがアンドレアスは980フランを札入れ

の中に持っていたからである。それは少ない額ではなかった。

8

映画館を出る前に、その同級生を探すのを明日の朝まで待つ必要はないのではという思いが頭を翳めた。特に彼が札入れの中に持っている可成り高額のお金のことを考えると。

残っているお金のことを考えると勇気が沸いてきて、友人の有名なサッカー選手の住所を入りのレジで聞いてみようと思心に決めた。そのためには映画館の主人に個人的に尋ねる必要があると考えた。しかしそうではなかった！ このパリでサッカー選手カンヤクほど名前が売れているやつはいない。ドアーボーイが彼の住所を知っていた。カンヤクはシャンゼリゼのホテルに滞在している。ボーイがそのホテルの名前を教えてくれた。すぐに我らがアンドレアスはそのホテルに出向いた。それは静かで小さな高級ホテルであり、サッカー選手やボクサーや時代のエリートが泊まるホテルであった。アンドレアスはホテルの玄関ホールに違和感を覚えたが、ホテルの従業員も彼に対して幾分奇異な感じを持った。ともかく従業員はカンヤク様は部屋におられ、すぐにでも玄関ホールに出て来られます、とアンドレアスに伝えた。

2、3分経ってからカンヤクが降りてきた。二人ともすぐに誰だか分かった。立ったままで学校時代の思い出を話し、その後一緒に食事に出かけた。ふたりは喜びで一杯であった。一緒に食事をする間、有名サッカー選手は落ちぶれた昔の友に尋ねた。「どうしてそんなに落ちぶれて見えるのだ、そもそも何という見窄らしい服を着ているんだ。」アンドレアスはそれに対して答えた。「どうしてこんな風になったかを話すのは恐ろしい。そんなことをしたら我々の好運な出会いの喜びが台無しになってしまう。そのことには触れないでおこう。何か良い話をしよう。」「沢山背広を持っているから」、と有名サッカー選手カンヤクは言って、「1、2着君に譲れたら嬉しいんだが。君は僕と教室で同じ机に坐っていたんだし、カンニングもさせてもらったし、背広一着なんて僕には何てことないから。君のところに送っておこうか」と付け加えた。アンドレアスはそれに答えて言った。「それは出来ないよ。理由は簡単で、僕には住所がないからだけど。つまりしばらく前からセーヌ川の橋の下に住んでいるから。」「それならば君のために部屋を借りてやろう。ただ背広を送るために部屋を借りるんだ、さあ行こう」とサッカー選手カンヤクは答えた。二人は食事を済ませて出かけて行く。カンヤクは一部屋借りることにした。この部屋は一日25フランで、パリの立派な「マドレーヌ」という名で知られている教会の近くにあった。

9

その部屋は6階にあり、アンドレアスとサッカー選手はエレベーターを利用しなければならなかった。アンドレアスには当然荷物はない。しかしポーターもエレベーターボーイも他の従業員もそのことを不思議だとは思わなかった。というのもそもそも二人が一緒にいることが一つの不思議であり、不思議の中に不思議があることは考えられないからである。二人が部屋の中に立った時、サッカー選手カンヤクは同級生アンドレアスに言った。「君には多分石けんが必要だろう。」

「我々のような者は石けんがなくとも生きて行ける。ここでは石けんなしで一週間生活するつもりだ。しかし体は洗うよ。でもこの部屋に敬意を表して何か飲みものを注文したいのだが。」と答えた。サッカー選手はコニャクを一ビン注文した。これを二人で飲み干してから、部屋を出てタクシーを拾ってモンマルトルに出かけた。しかも例のカフェに。女性がいて、2、3日前にアンドレアスが行った店に。二人はそこに2時間いて、学校時代の思い出話に花を咲かせたあと、サッカー選手はアンドレアスを家、つまりアンドレアスのために借りてやった部屋へ連れて行き、言った。「もう時間も遅い、君をひとりにするけど、明日にでも君に背広を送っておくから。お金はいるかい。」「いや、980フラン持っているから、少なくともはないから。家に帰ってくれ」、とアンドレアスは返事した。「2、3日したら来るから」、と友人のサッカー選手は言葉を残した。

10

さてアンドレアスの部屋は89号室である。ひとりで部屋にいるアンドレアスはバラ色で畝のある布で覆われた心地よい肘掛け椅子に坐っていた。まず目にしたのはバラ色の絹の壁掛けであった。優しい金色のオオムの首飾りが所々にあり、壁に掛けられた3つの象牙のボタン、ドア枠の右手とベッドの近くにナイトテーブル、その上に深い緑の笠のついたランプ、さらには白い取っ手のついたドア、その後ろに何か秘密めいたもの、いづれにしてもアンドレアスにとって秘密めいたものが身を潜めているように思えた。さらにベッドの近くには黒い電話があり、ベッドに身を横たえる者は右手でいとも簡単に手が届くように設えられていた。アンドレアスはその部屋の中を暫く見回した後、その部屋に馴染むような心がけようと思うと、突然興味がわいてきた。というのは白い取っ手のついたドアは彼の神経を苛立たせたからである。不安であり、ホテルの部屋には慣れていないにも拘らず、立ち上がってそのドアが何処に通じているのかを意を決して調べてみた。当然閉まっていると思っていたドアがひとりでに自分を迎えてくれるよう

に開いたとき、彼の驚きはどれほど大きなものであったか。

それは風呂場であることが分かった。輝く化粧タイル、ピカピカの白い浴槽、トイレ。要するに、これまでは彼の身の回りには公衆便所と言われるものがあったのである。すぐにでも彼は体を洗いたい欲求に駆られた。彼は両方の蛇口からお湯と水を浴槽に注いだ。浴槽に入ろうと服を脱いだとき、残念なことに替えの下着を持っていなかった。というのも下着を脱いだ時にそれが汚れていることに初めて気付いたからである。浴槽から上がって再び同じ下着を身に着けるかと思うと、不安になった。

浴槽に入って、自分が前回入ってから時間が可成り経っていることが分かった。嬉々として湯につかり、また立ち上がったとき、何をどうしていいのかわからなかった。好奇心というよりは途方に暮れて彼は部屋のドアを開け、廊下に出た。時同じくして丁度部屋から出てくる若い女性の姿が目に入った。そうだ、彼女は自分が礼入れを買った店の女の子ではと彼に思わせた。少しばかりカロリーネをも連想させたが。そのため軽く会釈をした。彼女も頷いたので意を強くして彼女に言った、「美しい」と。彼女も「あなたのこと気に入ってよ、一目見て。ひょっとして明日逢えるかしら」、と言って廊下の暗闇の中に姿を消した。しかし彼は愛おしくなって彼女の部屋の番号を見た。87号室。この番号を心にしっかり刻みつけた。

11

再び自分の部屋に戻って待った。聞き耳を立てていたが意を決して、明日の朝まで待たずに、その新しい娘と知り合いになろうとした。この何日か途切れることなく奇跡が重なったため、恩寵が自分に下ったと確信したにも拘らず、まさにそれ故にこそある種の思い上がりも当然だと思った。ある程度礼儀として恩寵の先を越さねばと彼は受け取っていた。恩寵をこれっぽっちも損ねることなく、87号室の娘のかすかな足音を耳にしたとき自分の部屋のドアをそっと開けて隙間から、その部屋に帰ってきたのが本当に彼女であることを知った。尤も彼の長年に渡る経験不足のため、美しい娘の方も、彼が自分の方を窺っていることに気づいていることを彼は知る由もなかった。過小評価される事情があった。その間、彼女は仕事柄身につけた姿勢を取った。さっと見た目だけでも部屋を片付け、天井の明かりを消してベッドに身を横たえ、夜用のテーブルランプの下で本を取り、読む格好をした。しかしその本はずっと昔に読んでしまっていたものであった。

暫く経っておずおずとドアをノックする音がした。彼女が予期したようにアンドレアスが入ってきて、敷居の

ところに立ち止まった。次の瞬間にももっと近くに寄るようにと誘いがあると確信していたにも拘らず。というのも可愛い娘は身動きせず、手から本を離すことなくただ尋ねた。「何か御用。」風呂、石けん、肘掛け椅子、壁掛け、オームのボタンや背広によって自信をつけたアンドレアスは答えた。「明日まで待てません、お嬢様。」娘は黙っていた。

アンドレアスは彼女に近づき、何を读んでいるのか尋ねた。そして率直に言った。「僕は本には興味ありません」と。「私ここは通りすがりの者なの。日曜日までここに滞在するの。明後日にはカンヌでまた舞台上に上がらなければならないの。」ベットの上から言った。「何しているの」、というアンドレアスの問いに、「カジノで踊っているの。ガビーっていうの。私の名前聞いたことない」と答えた。「確かに新聞で見たことがある」と、アンドレアスは嘘をついた。そして「その新聞を被って、、、」と言いつつ添えようと思ったが止めておいた。彼はベットの縁に腰掛けていた。美しい娘は拒まなかった。それどころか本から手を離れた。アンドレアスは朝までその部屋にいた。

12

土曜の朝、彼女が出発するまで彼女から離れまいと心に決めた。そうだ。彼の中にはこの若い娘とカンヌまで一緒に旅しようというほのかな憧れが芽生えていた。というのも貧しい人間が誰しもそうであるように、札入れに入っている少額を（特に貧しい呑んだくれはそういう傾向にあるのだが）高額と思いたくなっていた。次の日980フランをもう一度しっかり数え直してみた。その金が札入れの中にあり、その札入れは新しい背広の中に入っていたので、その額が彼にとっては10倍にも膨れ上がっていた。そのため1時間経って彼が彼女の部屋を出た後、美しい娘がノックもせず彼の部屋に入ってきたとき、彼は決して興奮することはなかった。カンヌに旅立つ前に、土曜日を二人でどのように過ごすかと彼女が尋ねた時も即座に答えた。「フォンテーヌブロー」と。いつかどこかで夢うつつでその名を耳にしたことがあった。何れにしても自分が何故この土地の名前を口にしたのか解らなかつた。

二人はタクシーをチャーターしてフォンテーヌブローへ行った。そこで明らかになったことは、美味しいものが食べられてうまい酒が飲めるレストランをこの美しい娘が知っていたということである。ボーイも彼女のことを知っていてファーストネームで呼んでいた。生まれつき嫉妬深かったらアンドレアスは気分を悪くしたであろう。しかし彼は嫉妬深くはなかつた。だから腹をたてることもなかつた。暫くふたりは食事と酒で時間をつぶし、旅を続けもう一度タクシーでパリに戻ってきた。突

然パリの明かりで輝く夕べが目の前に現れたが、ふたりはその夕べをどう過ごせばよいのか解らなかつた。偶然出くわした互いに無関係な二人の眼前にその夜は明るすぎる砂漠のように広がっていた。軽率にも男と女に与えられた本質的な体験を無駄にしてしまったあと、お互いが今から何をどうしたらいいのか解らなかつた。それ故、手始めにやるのが解らなければ我が時代の人間に残されていることは、映画に行くことであつた。ふたりが坐っている映画館は闇でもなく、決して暗がりでもない薄明かりと呼べるような暗さであつた。娘と我がらがアンドレアスは互いに手を取り合っていた。しかし気持ちの籠らない握り方であつた。精神的に参っていた。彼自身は中休みのときにはホールに出て酒を飲もうと思つていた。ふたりとも外に出て飲んだ。映画は彼には面白くなく、息の詰まる思いでホテルに入った。

次の朝、日曜日であつたがお金を返済しなければという義務感でアンドレアスは目を覚ました。前の日より素早く体を起こしたので美しい娘が目を覚まして、「どうしてそんなに急ぐの」と尋ねるくらい速やかだつた。

「借金を返さないと」と、アンドレアスは言った。「何故、今日は日曜よ」と女は尋ねる。「そう今日は日曜日だよ」と答えるアンドレアス。「あなたがお金を借りているのは女性それとも男性」と、という女の問いに、「女」と躊躇しながらアンドレアスは答えた。「何て言う名前。」「テレーゼ。」それを聞いて女はベットから飛び起きて、拳を丸めて両手でアンドレアスの顔を叩いた。

その後アンドレアスは部屋を出てホテルを後にした。振り返ることなくバティニョルの聖マリア教会の方に行つて行つた。今日やっと幼きテレーゼに200フラン返すことができることという思いで。

13

さてそれをお望みになつたのは神様である。それとも信仰心の薄い者ならば偶然と呼ぶかも知れないが——アンドレアスはまたしても10時のミサの終わった直後に到着した。当然のことであるが教会近くのビストロを覗いたついでに、さっきまで飲んでいたのである。遅れたのでまたもやその店に舞い戻って、飲み物を注文した。しかし彼がそうであつたように、またこの世界の全ての貧しい者がそうであるが、奇跡が重なるような体験をしたとしても、慎重に十分なお金があるかどうか調べてみた。札入れを取り出してみた。980フランのうち残りは少なかつた。

つまり残りは250フランであつた。あれこれ考えて解つたことはあの美しい女がホテルでお金を盗つたということである。しかし我がらがアンドレアスは大騒ぎはしなかつた。楽しみにはお金がかかるものと独り言。楽しんだのだから支払はしなければならない。鐘が、教会の鐘

が鳴るまでここで待とうと思った。そしてミサに行き幼き聖人に借金を返すのだと。その間は飲んでおこうと思った。それで飲み物を注文した。彼は飲んだ。ミサを知らせる鐘が鳴り始めた。「ボーイさん勘定」、と言って支払を済ませ、立ち上がって店を出た。ドアを出たところですぐに肩幅の広い男とぶつかった。その男の名前がアンドレアスの口からすぐに出た。「ヴォイテク。」男も同時に「アンドレアス」、と叫んで互いに相手の腕の中に飛び込んだ。二人はケベックで一緒に炭坑労働者をしていたのである。

「ここで俺を待ってるのなら、20分ばかり。ミサの間くらいそんなに長くはないよ!」、とアンドレアスは言った。「まったくだ」、とヴォイテクは言った。「何時からミサに行くようになったんだ。俺には糞坊主が我慢ならんだ。そんな坊主のところに行く奴はもっと我慢ならん。」それに答えてアンドレアスは言った。「俺は幼きテレーゼのところに行くだけさ。彼女に借金があるからな。」「お前が言っているのはあの幼き聖テレーゼのことか」、とヴォイテクは尋ねた。「そうだ、そのテレーゼだ」、とアンドレアスは答えた。「いくら借りているんだ」、とヴォイテク。「200フランだ」、とアンドレアス。「じゃお前のお供をするよ」、と言うヴォイテク。鐘が相変わらず鳴り響いている。二人は教会に入った。中に立っているとミサが始まり、ヴォイテクは囁くような声で言った。「今すぐ俺に100フラン呉れ。思いだしたんだ、あっちで俺を待っているやつがいるんだ。さもないと俺捕まってしまうよ。」

アンドレアスは躊躇することなく持っていた200フラン全てを渡してやる。そして言う。「すぐに後から行くから。」

テレーゼに返すお金が無くなってしまい、アンドレアスはもうこれ以上ここにいっても無意味だと思った。儀礼的に5分だけ待ってからヴォイテクの待つ向いのビストロへ行った。

今から二人は相棒でいることを約束し合った。

勿論、ヴォイテクには自分に金を貸してくれるような友人はいなかった。アンドレアスから借りた100フラン紙幣を丁寧にハンカチの中に隠し、結んでおいた。残りの100フランでアンドレアスを飲みを誘い、またしても、またしても飲むことになった。そして夜になるとお気に入りの娘たちがいるあの店に行き、丸3日間居続けた。彼らがそこを出たのは木曜日であり、ヴォイテクは次のように言ってアンドレアスと別れた。

「日曜にまた逢おう、同じ時間、同じ場所の同じ位置で。」

「じゃあね」、とアンドレアスは言った。「じゃあね」、と言ったらヴォイテクは姿を消した。

14

雨模様の木曜日の午後だった。前が見えない程の降りであったので、次の瞬間ヴォイテクは本当に姿が見えなくなった。

何れにしてもアンドレアスにはそう思えた。彼には友人が雨の中に消えて無くなったように思えた。丁度偶然出逢ったように。札入れの中に35フランを除いてはもうお金がなかったので、彼自身が思っているように運命に甘やかされて、これからも起こるであろう奇跡を確信して、貧しき者や酒浸りの者がそうであるように、再び神様に身を任せようと心に決めた。自分が信じるひとりの神様に。それで彼はセヌ川に行き、宿無したちの住むところに通じている階段を下りた。

ここで丁度階段を上ろうとしていたひとりの男と出くわした。その男をアンドレアスは良く知っているように思えた。だからアンドレアスは鄭重に挨拶をした。その身なりの良い年配の紳士は立ち止まり、じっとアンドレアスを見て、最後に言った。「お金が要るのですか、あなた。」

その声を耳にして、その人が3週間前に出会ったあの紳士であることが解った。

アンドレアスは言った。「私はあなたにお金を借りていることを思い出しました。それを聖テレーゼに返すはずだったんですが、しかしお金を返すことを既に3度妨げられました。」身なりの良い年配の紳士はそれに答えて言った。「あなたは思い違いをされています。あなたとお知り合いになる光栄に預かっていません。明らかに私を誰かと取り違えておられます。しかし私にはあなたがお困りのように思えます。あなたがお話しのテレーゼのことですが、彼女とは人間的に深くつながっておりますので、あなたがテレーゼに借りておられるお金を立て替える気持ちは当然あります。ところでいかほどですか。」アンドレアスは答えた。「200フランです。それにしても私のことを御存じないってですか。私は誠実な人間です。私に強く促されてもほぼ無理なことです。私には自尊心はありますが、住所がありません。この橋の下のどこかで寝泊まりしています。」「ああそんなことなんてことはありません。わたしもそこで寝泊まりするのが常です。私からお金を貰っていただければ、どれだけ感謝してもしたりない好意を私に示していただいたことになるのですが。私も幼きテレーゼに沢山借金をしています」、と紳士は言った。

「それでしたら、勿論あなたにお任せします。」アンドレアスはお金をもらって紳士が階段を上り終えるまで暫く待って、それから自分も同じ階段を上って80番街の彼の古くから知っているレストランへ直行した。ロシアアルメニア酒場『タリバリ』であり、そこに土曜日の夕刻まで居続けた。そのとき彼は心の中で思った。明日は

日曜日、バティニョルの聖マリア教会へ行かなければと。

15

酒場『タリバリ』には多くの人があった。というも寝るところのない者が何日も、昼はカウンターの後ろで、夜はシートで眠っていたからである。アンドレアスは日曜日の朝はとでも早く起きた。それはミサをすっぽかしてはという恐れというよりは店の親父から何か言われそうだという不安からくるものであった。飲み代、食事代、泊まり賃を何日も払っていなかったからである。それは彼の思い違いであった。店の親父は彼よりも早く起きていたからである。何故なら親父はずっと前からアンドレアスを良く知っていて、彼が勘定を踏み倒す機会をいつもうかがっている男であることを知っていたからである。而して我々がアンドレアスは木曜から日曜までの支払をしなければならなかった。たっぶり飲み食いした分とその他もろもろ、彼が飲み食いした以上のものを。何故なら店の親父は誰が支払が出来るか出来ないかを区別できたからである。しかし我々がアンドレアスは多くの飲み助同様支払ができないグループに入っていた。結局アンドレアスは持っているお金の大部分を支払った。しかしそれでもバティニョルの聖マリア教会の方に足を向けた。彼には多分解っていた。聖テレゼに全てを返すには十分なお金を最早持っていないことを。それにまた逢う約束をしていた友人のヴォイテクのことを思いだしていた。彼の幼き信心深い少女のことと同じぐらい。

今教会の近くまでやってきていたが、今度もまた10時のミサが終わった後だった。人々は彼の方にぞろぞろ歩いてきていた。そこでいつものようにビストロへ方向を変えようとした時、後ろからする声が耳に入り、突然肩にがさつな手を感じた。体の向きを変えるとそこには警察官がいた。

我々が知っているように旅券を持っていない我々がアンドレアスは彼と同じような境遇の者同様、ギクッとした。すぐにポケットに手を入れ、ちゃんとした旅券を持っているような振りをした。

「あなたが何を探しておられるか解っています。ポケットの中を探しても無駄ですよ。あなたは札入れを無くされたのです。これがそれです」、と言って冗談半分に付け加えた。「日曜日の朝早いうちからアペリティーフをそんなに飲んだらそうなりますよ。」

アンドレアスは素早くその札入れを手にとって、帽子をちょっと上げただけで落ち着きもなかった。そして真っすぐビストロへ駆けて行った。既にヴォイテクは彼の目の前にいたが、アンドレアスにはすぐには解らず、彼と解るまで暫くかかった。アンドレアスは心を込めて挨拶した。二人とも互いに奢りあって決して飲むことを止めなかった。そしてヴォイテクは大抵の人間がそうで

あるように、鄭重にシートから立ち上がりアンドレアスに上座を譲った。それほどよろめいているにも拘らず、テーブルの周りを廻って向かいの椅子に腰掛け、お世辞を言った。そして二人はもっぱらペルノーを呑んだ。

「またしても俺に奇妙なことが起こった」、とアンドレアスは言った。「俺たち二人のデートのためにこっちへ来ようとしたとき、警官が俺の肩を掴んで言ったんだ。『札入れを落とされましたね』と。そして俺のものでない札入れを呉れたんだ。俺はそれをポケットに突っ込んだんだ。今からそれが何かを調べてみようと思う。」

そう言って彼は札入れを取り出してじっくり調べた。その中には彼とはまったく無関係の紙切れが入っていた。お金も入っており、札を数えると丁度200フランある。それを見てアンドレアスは言った。「おい見ろよ。これは神様の徴だ。今から行ってやっとなの借金が返せる。」

「ミサが終わるまでに時間があるぞ、一体お前は何のためにミサを必要とするのだ。ミサの合間には何も返済はできぬし、ミサが終わってから聖具室に行けば良い、その間は飲んでおこう」、とヴォイテクは答えた。「もちろんのお前の好きなように」、とアンドレアスも言った。その瞬間ドアが開いてアンドレアスは不気味な胸の痛みと頭の中に大きな脆さを感じると同時に、ひとりの若い娘が入ってきて丁度彼の向いの席に座った。彼女はとでも若かった、彼がこれまで見たこともない程若かった。彼女は青い服を着ており、いわば空でしか出せないような青さであった。時たま祝福された日の空の青さである。

アンドレアスはよろめきながら向こうへ行き、身をかがめて若い娘に言った。「ここで何をしているの。」「両親を待っています。丁度ミサから出てくるところです。わたしをここへ迎えに来てくれるの。4週間に一度」、と彼女は言ったが、こんなに突然話しかけてくる中年男に対してひどく怯えており、彼女は少しばかり畏れていた。

アンドレアスはその後尋ねた。「あなたの名前は。」

「テレゼ」、と彼女は言った。

それを聞いてアンドレアスは大きな声で言った。「なんと魅惑的なことか、俺は考えなかった、こんなに大きな、こんなに小さな聖女が、こんなに大きく、こんなに小さな信心深い女性がわざわざ私のところにきてくれる、何て栄誉なことか。こんなにも長いこと彼女のところにいかなかった後で。」

「私にはあなたの言うておられることが理解できません」、と言う幼き娘の動揺は可成りのものであった。

「それはあなたが繊細だからですよ」、とアンドレアスは答えた。「あなたの繊細さです。それは素晴らしいと思います。長いことあなたに200フラン借りていて、それを返しに来なかったのです、聖女さま。」

「あなたは私に借金などされていません。しかしこの

小さなバックにお金が入っています、どうぞこれを持って行って下さい。だって両親が迎えにきますから。」

そう言って彼女は100フラン紙幣をバックから取り出して彼に渡した。この光景を鏡を通して見ていたヴォイテクはよろめきながらも肘掛け椅子から立ち上がり、ペルノーを2杯注文して我らがアンドレアスをカウンターに引きずって行って、一緒に飲もうとした。しかしアンドレアスがカウンターに歩み寄ろうとした時、ずた袋のように倒れた。ビストロに居た者皆が驚いた。ヴォイテクも驚いたが、一番驚いたのはテレゼという名の娘であった。近くには医者もないし薬局も無かったので、彼は教会へ引き連れられて行った。しかも聖具室へであ

る。

何故なら神父は生死についていかほどかは解っていたからである。信仰心の無いボーイでもそう思っていたように。テレゼという名の女の子は致し方なく付いて行った。

我らがあわれなアンドレアスは聖具室に連れていかれたが、残念ながら最早口がきけるような状態ではなく、幼き信女から借りていたお金の入った上着の内ポケットを掴もうとするだけであった。そして言った、「テレゼ様」、と。それから最後の溜め息とともに息絶えた。神よ、我々全ての酔っぱらいに安らかで素晴らしき死を与えたまえ！